

## 和歌山県海南市下津地域

平成30年度  
認定

### 下津蔵出しみかんシステム

和歌山県海南市下津地域は、約1900年前、垂仁天皇の命を受けた田道間守（たじまもり）が中国からみかんの祖となる橘を持ち帰り植えたと言い伝えられていることから、日本の「みかん発祥の地」とされています。

当地域は、ほとんどが傾斜地であることから、約400年前から、独自の石積み技術により段々畑を築き、みかんを栽培し、急傾斜地等では、草生栽培により土壌の流出を防ぎながら、びわを栽培してきました。

また、みかん園内に木造土壁の蔵をつくり、適切な温湿度のもとで貯蔵することで、みかんを絶妙な糖酸バランスに熟成させる「蔵出し技術」を生み出しました。

さらに山頂や中腹に雑木林を配置することで、水源涵養や崩落防止などの機能を持たせるとともに、里地・里山の豊かな生物多様性を維持し、持続可能な農業システムを構築しています。



1 海南市下津町鉢伏山からの風景

2 みかんの神「田道間守」を祀る橘本神社の「みかん祭」

3 急傾斜地で栽培される「下津びわ」



1 「高野山との結びつき」と「平地の少なさの克服」の歴史を物語るランドスケープ

2 高野山に豊作を感謝・祈願する「御田」(おんだ)

3 畦畔での栽培を起源とし、日本一の産地を築いた「ぶどう山椒」

## 和歌山県高野・花園・清水地域

令和2年度  
認定

### 聖地 高野山と有田川上流域を結ぶ 持続的農林業システム

高野・花園・清水地域のシステムは、100を超える木造寺院を維持してきた「高野六木制度」と、高野山とともに発展してきた花園地域の「傾斜地を利用した仏花栽培」、清水地域の「棚田の畦畔を利用した多様な植物の育成・栽培」による農林業システムです。

度重なる火災に見舞われてきた高野山では、建築用材として有用性の高い6種の針葉樹について、寺院の建築・修繕以外での伐採を禁じ、必要となる樹のみを択伐し、天然下種更新（てんねんかしゅこうしん）などにより森林を更新する「高野六木制度」を生み出すことで、用材の永続的自給を可能にしました。

有田川と参詣道「有田道」により高野山と繋がる花園・清水地域の人々は、農業・林業を主業としつつ、高野山の需要にも応える多様な農林産物を傾斜地や棚田の畦畔で育成・栽培することで、平地の少なさを乗り越え、生活を発展させてきました。

## 和歌山県有田地域

令和2年度  
認定

### みかん栽培の礎を築いた 有田みかんシステム

有田地域では、高い観察力を持った生産者が、数多くの優良品種を見出すことで、栽培品種のバリエーションを高めてきました。加えて、みかん農家自身が高品質な「二年生・土付き苗木」を生産しており、産地内での品種育成と苗木生産の組み合わせにより、産地の自立性を向上させています。

栽培面においては、多様な地勢・地質の組み合わせに応じた栽培・品種選定を行うことで、高い品質を誇る「有田みかん」産地を地域全体で形成してきました。また、日本初のみかん共同出荷組織「蜜柑方（みかんがた）」を起源とする多様な出荷組織が共存することで、「有田みかん」ブランドを維持しています。

本システムにより、有田地域は、400年以上にわたり持続可能な発展を続け、日本一の生産量を誇る産地になるとともに、みかん栽培の礎を築き、他産地の発展を牽引してきました。



1



2



3

1 地域を発展させ続け、日本のみかん栽培を牽引してきた有田みかんシステム

2 有田川兩岸で営まれる地形・地質に応じたみかん栽培

3 高い観察力による枝変わりの発見



1



2



3

1 砂鉄採取跡に広がる農村景観

2 唯一「たたら製鉄」を継承

3 日本三大蕎麦の「出雲そば」

## 島根県奥出雲地域

平成30年度  
認定

### たたら製鉄に由来する 奥出雲の資源循環型農業

中国山地の山間にある奥出雲地域は、日本古来の製鉄法「たたら製鉄」の原料である砂鉄を採取するため、鉄穴流し（かんながし）という採掘技術で山々を切り崩し、採掘のために導いた水路やため池を再利用して水田を開発してきました。

運搬や農耕のため17世紀初頭に行われた和牛改良の知識を活用して肉用牛の種雄牛を造成し、牛ふんや山草を堆肥化して土づくりを行い、良質な「仁多米」を生産しています。また、約30年周期で伐採してきた薪炭林はシイタケ生産に活用され、森林や草地に棲むハナバチ類は遺伝資源である在来ソバの受粉を促し、「出雲そば」のルーツとなり、食文化が色濃く残っています。

棚田には墓地や神木を祀った小山「鉄穴残丘（かんなざんきゅう）」が点在し、神（自然）を畏れ祖先を敬う日本の宗教観を象徴する農業景観を形成しています。